

化学部会（2012年月6月度）研修会報告

日時：2012年6月21日（木） 18:00～20:30

テーマ：講演会

講演 環境倫理の講義から見る地球の未来

後藤 達乎 近畿化学協会化学技術アドバイザーG 事務局長

大阪府立大学・京都大学・関西大学非常勤講師、元株式会社ダイセル

大阪府立大学工学部の必修科目「環境倫理」を非常勤講師として2名で分担して教えている。本日は全15ステージの中で、「持続可能な発展と環境倫理」の講義内容と方向性についてお話しする。

環境倫理とは、「自然と人間との関わりの中で、人間の行為の自由を制約する規範」と言っても良く、この観点から環境にはトリレンマ（人口増加、資源・エネルギーの枯渇、地球環境の破壊の相乗）が存在し、人類の危機が迫っていることに気づく。

環境倫理には、①地球の有限性、②世代間の倫理、③生物種の保護、という3つの主張があるが、先進国と途上国の間で、特に①地球の有限性に対して、同レベルの生活を享受する権利の主張と、現状をベースとして皆で考えようという主張に分極しており、方向性を定められていない。しかし、地球の46億年の歴史を24時間に例えると、人類の誕生は、12月31日の午後2時頃であり、産業革命は午後11時59分58秒に起こったことである。産業革命時点での世界人口（10億人）が2011年には70億人に迫っていることから、この2秒間の人口爆発はすさまじい。

環境容量、環境収容力と言う考え方があり、環境を損なうことなく受け入れることのできる人間の活動または汚染物質の量を表す。生態学の面からは環境容量に達すると定常状態となるが、地球の扶養可能人口は1980年頃に限界を超えたと考えられている。

限界を越えたらどうなるかの例として、イースター島（太平洋の孤島で1500年前に人類が住み始めた）がある。1722年に発見された時の状況は、3,000人ほどの島民が茅葺の小屋や洞窟で原始的な生活を送り、絶え間のない戦闘に明け暮れた島で、手に入る乏しい食糧を補うために互いに食べ合うという絶望的な状況であった。イースター島はモアイ像建造など世界で最も進んだ社会を築いたが、環境を破壊した結果として発見当時の状況に変革した衝撃的な例である。

持続可能性について次の二つの考え方がある。弱い持続可能性：機能が同等であれば“自然資本”を“人工資本”にある程度代替させてもよい。強い持続可能性：“自然資本”はあくまで自然資本としての再生能力を維持すべき。どちらを取るかも課題であるが、地球を直径1mの球に例えると、生物の生活圏は表層部の1.5mmに過ぎないことを前提とし、戦争、紛争、内乱の発生しない、「明るい地球の未来に向けて、持続可能社会を目指そう!!」と結んでいる。

（文責 藤橋雅尚、監修 後藤達乎）